観世音寺子院跡（推定金光寺跡）（太宰府市）

ここ観世音寺の北、四王寺山の南麓の座禅谷には、字「今光寺」の地名がある/右手に標石がある

ここは中世寺院跡と思われる礎石建物、火葬墓群の他、陶磁器、漆器、木製品など、数多くの遺物が出土した推定「金光寺跡」

右手に入って行く

礎石建物跡が見えて来る

説明坂がある/正面は建物跡⑥

史跡　観世音寺境内および子院跡

推定　金光寺跡

空中写真による
遺跡全景

この遺跡の特徴は礎石建物に伴なって石塔群・火葬塚が立地した場所に造営されていることである。下図の建物群のように墓所に対する礼拝堂（三間堂）的性格を帯びた建物もある。

この遺跡の性格については観世音寺子院の一つ金光寺に比定する見方が有力であるが、武士の居館跡とする見方もある。

復元整備に際しては盛土を行なって遺構を保護し、上屋に模造の材等を用い建物を表現している。

池

井戸

石塔群

地鎮具を埋めた穴（建物内）

遺構図

[illegible]記』に観世音寺の子院（別院）として49院の名が記されており、そのなかに「金光寺」の寺名が見える。現在、この地は小字名を今光寺（コンコウジ）と称し、金光寺と音通することから有力な比定地にされてきた。

昭和53年から九州歴史資料館によって本格的に発掘調査が実施され、遺構の全容がほぼ明らかとなった。

検出された主な遺構は礎石建物６棟・池・石塔群・火葬処などである。これらは建物の建て替え・改修等から大きく３期に分けられ、存続した年代は13世紀後半～16世紀前半にわたっている（第Ⅰ期…13世紀後半～14世紀中頃・第Ⅱ期…14世紀中頃～14世紀末・第Ⅲ期…14世紀末～16世紀前半）。この遺跡の最盛期は第Ⅱ期で、下図のような中央の広場を中心にして建物が整然と配置されている。こうした建物間の往来には通路を設け、建物の周囲には排水のための雨落溝が巡っている。出土遺物としては膨大な量の土器・陶磁器・瓦・木製品・金属製品がある。

この遺跡の特徴は礎石建物に伴なって石塔群・火葬処が近接した場所に造営されていることである。下図の建物⑤のように墓処に対する礼拝堂（三間堂（さんげんどう））的性格を帯びた建物もある。

この遺跡の性格については観世音寺子院の一つ金光寺に比定する見方が有力であるが、武士の居館跡とする見方もある。

復元整備に際しては盛土を行なって遺構を保護し、上面に模造の柱等を用い建物を表現している。

空中写真による
遺跡全景

石塔群（下方）と火葬処（上方）

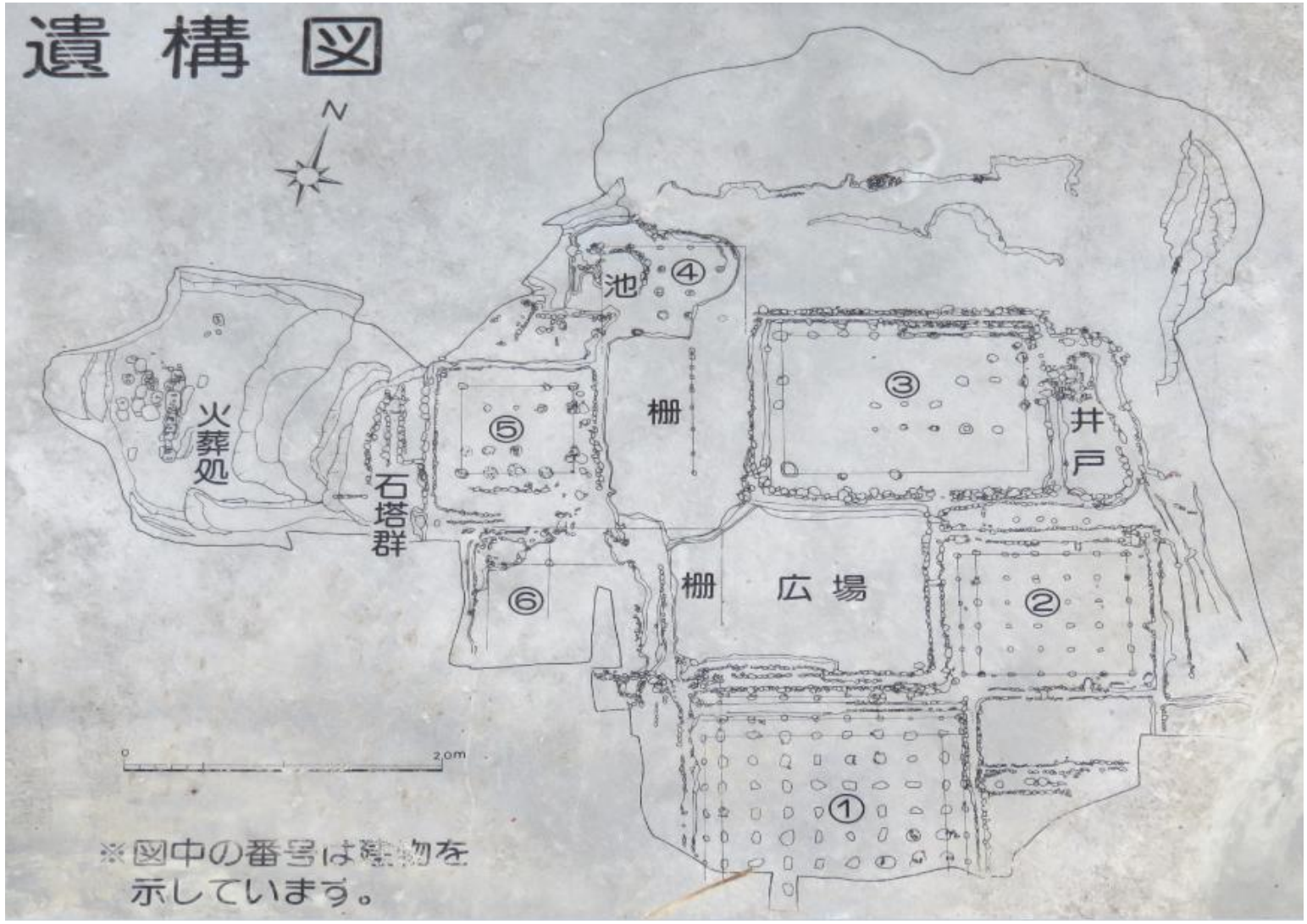
池

井戸

石塔群

地鎮具を埋めた穴（建物◎）

遺構図



※図中の番号は建物を示しています。

北側の高台から全体像を見たところ

建物跡①を西側から見たところ

建物跡③を西側から見たところ

手前から建物跡③、②、①と右手に建物跡⑥/北側から見たところ

右手には建物跡⑤と右手前に池④が見える

これは建物跡⑤/東側から見たところ

同じく南東側から見たところ/左手に石塔群が見える

これが石塔群/左上に東屋が見える

西側から見たところ

これが東屋/この辺りが火葬処らしい/説明坂が立っている

推定　金光寺跡

石塔群および火葬処

建物群に隣接する西方の丘陵部は、斜面を平坦に削って整えている。この平坦な場所には遺体を荼毘に付す火葬施設があり、さらに下方の斜面は五輪塔・板碑・宝篋印塔・宝塔といった石塔群からなる墓処が営なまれていた。この石塔群は上・中・下の区画からなり、それぞれいくつかの小グループに分けられる。

五輪塔の中には、焼骨を納めた壺を伴なったものや、また壺の代りに丸瓦を利用した珍しい蔵骨器の例もある。

なお出土した宝篋印塔の台座には応永四年(1397)の刻銘が施されており、墓処の造営年代を考える一つの目安となっている。

石塔群の正面は全て東側の建物群を向いており、墓処と建物群が極めて密接な関係にあったことが知れる。

現在、火葬処・石塔群とも埋めもどし、墓処には模造の五輪塔を置いている。

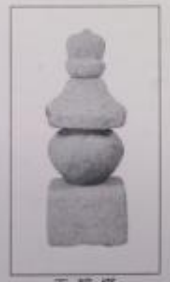
平成2年3月31日
福岡県教育委員会

▲ 石塔群
石塔群はいくつかの小グループに分かれて置かれ、周囲を石列や石垣で区画している。

◀ 火葬処
遺体を火葬するために組られた薪が密集して発見された。

蔵骨器出土状態

応永四年銘 宝篋印塔台座



五輪塔

板碑

蔵骨器

石塔群および火葬処

建物群に隣接する西方の丘陵部は、斜面を平坦に削って整えている。この平坦な場所には遺体を荼毘に付す火葬施設があり、さらに下方の斜面は五輪塔・板碑・宝篋印塔・宝塔といった石塔群からなる墓処が営なまれていた。この石塔群は上・中・下の区画からなり、それぞれいくつかの小グループに分けられる。

五輪塔の中には、焼骨を納めた壺を伴なったものや、また壺の代りに丸瓦を利用した珍しい蔵骨器の例もある。

なお出土した宝篋印塔の台座には応永四年(1397)の刻銘が施されており、墓処の造営年代を考える一つの目安となっている。

石塔群の正面は全て東側の建物群を向いており、墓処と建物群が極めて密接な関係にあったことが知れる。

現在、火葬処・石塔群とも埋めもどし、墓処には模造の五輪塔を置いている。

平成2年3月31日

福岡県教育委員会

そこから南東方向を見下ろしたところ

参考ホームページ

http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/_common/pdf/kaisetu/kaisetu65.pdf#search=%27%E8%A6%B3%E4%B8%96%E9%9F%B3%E5%AF%BA%E5%AD%90%E9%99%A2%E8%B7%A1%EF%BC%88%E6%8E%A8%E5%AE%9A%E9%87%91%E5%85%89%E5%AF%BA%E8%B7%A1%EF%BC%89%27